



TITLE:

# 滿珠國成立過程の一考察

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

---

CITATION:

三田村, 泰助. 滿珠國成立過程の一考察. 東洋史研究 1936, 2(2): 117-135

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145584>

RIGHT:

# 滿珠國成立過程の一考察

三 田 村 泰 助

この小篇は曾つて本誌に載せた「天命建元年次考」の補篇をなすものである。題して「滿珠國」といふ。それは清廷入關前「後金國」と稱せし以前の國名の謂である。この小篇に於て從來の滿洲國號に關する諸説を批判して以つて滿珠國 Manju gurun の存在を確め、この國が如何なる社會様相の下に成立したかを考察しやうと思ふ。

## 一

「滿洲」國號の問題は今日迄に一通り検討しつくされて最早議論の餘地はないかに見える。この問題に關する諸説は凡そ次の二説に要約される。その一説は清太宗崇徳改元の際それ以前の國號たりし「後金國」の名稱を抹殺し、之に代ふるにそれ迄の國號は「滿洲」なりと偽作したとする所謂太宗偽作説であり、又學界の通説でもあ

る。他説は「滿洲」なる名稱は部族名として太祖の時代より存し、適々太宗改元の節之を復活したものならんと言く。

處で「滿洲」は太祖實錄に

布庫里雍順居長白山東俄漠惠之野俄朵里城。國號曰滿洲。是爲滿洲開基之始也。

とある。後に乾隆帝の勅により滿洲源流考が撰述された際「滿洲」國號に就き右の實錄の説を敷衍して「我朝肇興時。舊稱滿珠。所屬珠申。後改稱滿珠。而漢字相沿爲滿洲」と述べて居る。現在迄の滿洲國號に對する諸説は實は此の上諭に對する批判から出發して居る。

太宗偽作説に云ふ。この上諭に基くと已に國初より滿洲なる國名が存した事になるが、秘府に藏されたる太宗の天聰年間の公文書及滿洲に散在する二三の金石文或は

明朝鮮の記録には「金國」「建州」の名稱のみ存して「滿洲」の語は全然見當らない。此の事は「滿洲」が太宗の僞作である事を明證するものであり、乾隆帝は故意にこの僞作を是認したものであると。之に對して反對説は太宗僞作説論者の擧げる種類の史料に「滿洲」の名が見えないからとて事實上存しなかつたとは斷言出来ないし、乾隆帝の上諭を論理的に仔細に検討すると一概に無視し得ぬものがあると云ふのであるが極めて消極的な議論である。

故に國號問題に關しては右の二説の主張する所を考慮すればよい譯で結局次の如く結論し得る。即ち太祖時代に「滿洲」なる名稱が存したか否かを證し得る最も確實な史料の有無といふ事である。

然らばかゝる要望を滿す様な史料が今日迄論争の圈外に残されてあつたらうか。之に對しては内藤先生によつて清初史研究の第一の史料といはれた太祖滿文老檔が存する。されば次に滿文老檔を究明しなければならぬ。

太祖老檔が太祖實錄と比較してより根本的な史料である事は曾つて證した。<sup>①</sup>他に幾多の證明があつて今日では最早動かし難い事實である。然し乍ら我が國に將來され

た現存の滿文老檔は奉天崇謨閣所藏の乾隆重鈔本の複寫版であり、従つて今迄の老檔に對する史料の非難はこの乾隆重鈔と云ふ點に向けられて居た。即乾隆帝は事毎に事實を歪曲した張本人であるから老檔にも帝の改修の手が延ばされたであらうと云ふのである。今この疑は解く事が出来る。それは北平故宮博物館に乾隆重鈔の際使用したと思はれる原稿本が存して、之は舊滿洲字（無圈點文字）で明代の古文書の裏にかゝれて居る。元來太祖老檔は太祖の在世中より編纂され太宗の天聰年間に至つて完成されたものであるが、右の稿本はその時代のものと思はれる。

昨年三國谷學士の盡力により之を調査する事を得たので以下その結果に基いて國號問題の考察を進めやう。

重鈔本老檔と原老檔との關係に就いては、現在故宮にあつて老檔の整理に従事して居る李德啓氏の報告を見れば自らの性質が分る。それに依ると「原檔無圈點」の老滿文は乾隆の時に至つては己に識別が困難になつたので乾隆六年鄂爾泰・徐元夢等に命じて原檔中の識別し難い字を掲めて「滿文無圈點字典」を作つた（中略）乾隆四十年には大學士野赫德等無圈點及び加圈點草本正本各一部を重鈔し四十三年には亦一部を重鈔して盛京崇謨閣に藏した。之で原檔の外に重鈔本が三部署する事になる（中略）重鈔本の内容は原檔と大體差異がない

が、其文字の間に時々増減が存する。」とある。(文獻特刊)

「滿洲」名稱に關して老檔と實錄との記事を比較照合して見ると、實錄に存する「滿洲國」の名稱は後に掲げる例の他は之を老檔の中に見出し得ない。そしてその箇所に該當する稱號は多くの場合「女眞國」jušen gurunで寫され、又は「建州」giyan jeo「後金國」amala aisin gurun「金國」aisin gurun等の、實錄には無い語が二三存するのみである。(女眞國は女真人の國の謂である)この簡単な例證により次の事が分る。即ち太宗が國號に關しては太祖老檔に改竄を加へなかつたといふ事である。事實、天聰年間には「大金」を稱して居たので「滿洲」なる名を偽作する必要がなかつたものと思へる。

然らば太祖滿文老檔には如何なる形式で「滿洲」なる稱號が出て來るか。今之を例證すると、先づ天命十年八月に蒙古のコルチン部に送つた太祖の國書の一節に(祖  
老檔六十五卷  
實錄と同文)

ニカン nikan (明國) ソルホ solho (朝鮮) ウラ ula  
ホイファ hoifa ハク yehe ハダ hada 我がマンジュ  
國 manju gurun 我等に城なくんば汝蒙古我等をし  
て一椀の飯すら喰はしめないであらう。我等弱き爲

め城に據りて過し來たり。

とある。之によると明・朝鮮や女眞族國のホイファ・ウラ等に對立してマンジュ國が存在した事になる。處で太祖老檔の内天命九年以後は、太宗時代に入つて編纂されたものであるから、右の引用中のマンジュ國は竄入の疑があるが、同じく太祖老檔の天命十一年三月の條に hio hyo seng (劉學成?)<sup>③</sup>の奏文があつて

事を創むるものは人、事をなさしむるものは天なり。汗陽出づる方の一偶に生れ、幼より軍に従ひ、千の謀千の慮神鬼もその進退を悟らず(中略)天は汗に先に建州 giyan jeo 一圓の地を統べ與へたり。それを汗は獲て知りたるか。その時汗の心何ぞ建州のみにて終るべきと思ひたるなり。ウラ・ハダ・ホイファ・東海の國を獲んと思ひたるか。天は汗をして之等の國を獲さしめ軍の力を増さしめたり。(以下略)とある。今崇德本太祖實錄を見ると「滿洲」の處に「南朝誤名建州」と注し建州は明・朝鮮が附した名稱であり自國人は滿洲と呼ぶべきであると規定して居る。之は實錄編纂の方針であり同時に太宗の意圖であるから、若し崇德元年に老檔の改修の事があれば右の奏文の「建州」の



語も削除さるべき筈である。況んや老檔には「後金國」「金國」の語も存する故に、老檔の記事は疑へないと思へる。従つてコルチンへの返書中のマンジュ國は竄入であり建州は見過しとも云へない譯である。そこで改めて右の奏文を読むと、太祖が「建州一圓の地」を統べて他の女眞族國ウラ・エホ等に對立したとあるから、コルチンへの返書と合はせ考へれば建州の故地に立てた國名はマンジュ國でなければならぬ。この事は老檔に存する次の記事によつて更に明瞭になるであらう。即ち太祖老檔の癸丑年(萬曆四十一年)ヌルハチがエホの攻略を開始した條に

スレンヅレン汗 sure kunduren han の軍エホの十  
九ガシヤン ga<sup>han</sup> (の義) を陥れたるにより、エへの  
ギンタイシ gintaishi プヘング buyenggu ニカン國の  
萬曆汗に告げ「ハダの國を陥れたり。ホイファの國  
を陥れたり。ウラの國を陥れたり。今エへを滅さん  
とす。我等女眞國 jušen gurun を滅して後、汝ニカン國を征し遼東を取りて己れの住居となし瀋陽の地  
開原の地をとりて馬の群を放つならん」と告げたの  
でニカンの萬曆汗は信じたり。之より前ニカンの萬

曆汗一夜に三度彼に向ひ一異姓の女子と覺しきもの  
馬に跨り鉞をとり彼を斬らんとする夢を見たと言  
ふ。翌朝諸臣に問ひたるに女子と覺しきは女直 no.  
o. chih マンジュ國のスレ・クンヅレン汗我がニカン  
國の汗位を奪はんとするなりと云ひたりとか。それ  
よりニカン汗の心苦しみたる處にエへのギンタイシ  
プヘングその詞を告げたる故その二つの言葉を合は  
せ考へ、ニカン汗は女直マンジュ國のスレ・クンヅ  
レン汗に向ひてエホを討つ勿れ(中略)スレ・クンヅ  
レン汗の謂へらく、我が女眞國の戰であるぞ(中略)  
吾エへを討つなり。大國のニカン吾何の故に討つ  
べきか。(以下略)

とある。この記述の中に當時の女眞族國の巨酋が相次いで倒れヌルハチの率いる「女直マンジュ國」が將にジュセン國中に覇者たらんとするの趨勢を物語つて居る。處でマルチニの韃靼戰記に<sup>④</sup>

「彼等の間に戦ひが行はれて、一六〇〇年遂に彼等は此等全ての地方を唯一つの王國となすべく同意し、その國をニニチエ Niuche と呼んだ。」

とある。このニニチエ王國は正に女直マンジュ國の謂で

あらう。されば隣國に對する國境の觀念等も明確に存し、例へばエホのクレン城を攻めた時に「その國のクレンと云へる城(中略)マンジュ國の日出づる方の端、東海の北にあり」と述べて居る。

以上マンジュ國はエホ・ハダ等の女眞族國と相對して現實に形成された國家名である事を確め得た。

然しマンジュ國なる名が何時の頃より稱せられたかは明瞭でないが、マルチニの前文には一六〇〇年に「ニユチエ」王國を建てたとある。ヌルハチが建州の地を統一したのは略一五九一年前後の事であり、一六〇五年(乙巳年)には朝鮮に文書を送つて「建州等處地方國王佟」と自署して居る程だからこの名稱がこの時期のものである事は凡そ見當がつく。處で一五九九年にはヌルハチは滿洲文字の制定を行つた。この事はその民族の自覺意識の現はれであると思はれる故、當然自國にも新しく制定された文字による國名を附したに違ひない。前掲マルチニの記事と合せて一六〇〇年前後にマンジュグルンを稱へたと推測しても餘り不當な見解でもあるまい。

然らば何故明・朝鮮が「建州」を稱してマンジュ國と言はなかつたか。前引エホ攻略の記事を見ると自ら分る

事で、女眞族を統一する迄は極力明の干涉を避け又朝鮮との和平を計つた爲、かゝる政治工作より從來の「建州衛」の名稱を使用し異心を示さなかつたものと思はれる。そしてその事には物資獲得と云ふ現實の利得が豫約されて居た事を併せ知るべきであらう。

マンジュ國はマンジュの君臨する國の謂である。然してマンジュはヌルハチの尊稱に他ならぬ。柵中日錄に「一將曰滿住奴在城」とあり、老檔に「マンジュの兵強く勇なりと云ふ」とある。マンジュは女眞族間に於いて偉い酋長に對する尊稱として古くより傳はり、之が文珠菩薩の轉音である事は早く内藤先生により説かれた。太祖實錄圖にヌルハチが數珠を手にして臣下に謁見するの様が隨所に見られ、「奴酋常坐手持念珠而數之」とある建州聞見錄の記事と合はせて充分に先生の説を裏づけて居る。天命十一年に太祖と蒙古コルチン部のオーバタイジとの間に取り換した誓文の一節に

「天なる父助け救ひたり、マンジュの汗亦慈しみ救けたり。天の祐けマンジュの汗の慈しみを忘れず謝せんと思ひ好を通ぜんとマンジュの汗に會ひに來て天地の道に従ひて誓詞を祝ひ誓ふ」<sup>⑤</sup>

とある。之によれば太祖は終世マンジュと稱されたものと思はれる。當時蒙古に興隆せる佛教は太祖の庇護を受けてこの國に流入された。その保護者たる太祖を生佛として讃へる事は前記の行狀と思ひ合せて尤もの事と謂へる。蒙古源流に「昔のマンジュの金汗の族の子孫として生長した英雄太祖」とある所以でもある。<sup>⑥</sup>

要之マンジュ國はマンジュなるヌルハチの權勢の下に結合された新興國であつて、ウラ・エホ・ハダ・ホイフアの名稱がその據りし地名に由來せしに對し、マンジュ國は絶大なる權力者を象徵する自撰の國名である處に此の國形成の特異性が見られる。

萬曆の末年エホを降して女眞民族統一の業なつた後、外に後金國を稱し、内にジュセン國を稱するに至つてマンジュ國は解消した。ジュセン國を以つて自らを呼ぶ事は多年の要望であり、自餘のジュセン族を率いて漢人の國、蒙古人の國、高麗人の國に對立するに至つた。その事を太祖實錄に「天祐を得て百姓の女眞國 tanggu hala jušen gurun を悉く定めたりき」と述べて居る。老檔にマンジュ國の名で自己の活動を記述する事が天命建元以後姿を消した所以である。天命の末期にマンジュ國の名

が老檔に見えるのはこの名稱の下に自國の過去の歴史を説く場合である事を特筆せねばならぬ。

かく見來る時、滿洲源流考に存する乾隆帝の上諭は果して事實を曲筆したものであらうか。

#### 註

① 拙論「天命建元の年次に就いて」参照。

② 今西學士「清三朝實錄の纂修」(下) 史林第二十卷四號八二三頁。

③ 漢文舊檔奏疏稿に據る。

④ Martin Martini, Histoire de la guerre des tartares contre la Chine. p<sup>8</sup>

⑤ 滿洲實錄には manju gurun i i an 「マンジュ國の汗」に作る。處で老檔には「金國汗 aisin gurun i han 誓ひし事」と云ふ書出しの下に太祖の誓文を載せ、次にオーバタイヂの誓文を連れて居る。それ故コルチン側より manju gurun とは謂はなかつた筈で従つて實錄の文は竄入である

⑥ I. J. Schmidt, Geschichte der Ost-Mongolen, und ihres Fürsten verfasst von Sšanang Sseisen Chung-taischi der Ordos. S 284-5

⑦ 太祖實錄卷一。

⑧ 滿文滿洲實錄卷八。漢文の條には此の句を缺く。

前説にマンジュ國<sup>グン</sup>の存在を證し、それが明末に於ける遼東の女眞民族内の一國名である事を確めた。

然らばグルン *gurun* とは如何なる意味であらうか。

グルンは普通「國」と譯されて居るが、シロゴゴフの指摘せる如く可成り曖昧な言葉である。<sup>②</sup> 老檔を検しても「國」「國家」「王朝」の義に使はれ、又廣く種族の住する地域、その意味から轉じた「國の民」の義にも使はれて居る。これは元來老檔といふものがマンジュ國の生長するにつれてその成行のまゝに記録されて行つた結果全體としては一貫した觀念が見られない爲であらう。太祖實錄はその中央集權的な國家觀念の立場から編纂された爲、過去の歴史の中に發展の段階を認め一應之を體系づけて敘述して居る。例へば老檔には存しない所のアイマン *aiman* (部族) の概念を導入したりして居て、グルンの意味も可成り明確に規定されてある。その故に吾々は兎も角も實錄に従つて研究の歩を進めるべきであらう。

註 太祖實錄は現存の數種類の内「滿洲實錄」中の滿文が尤も原初的な形を示して居る。この事は今西學士の「清三朝實錄の纂修」中に詳しく論ぜられて居るから同論文を参照されたい。本論文に於ては實錄の文は斷はりのない限り滿洲實錄

の滿文に據つた。

實錄には太祖興起前に於ける遼東の女眞族の種族分布とその亂離の様を述べて

その時處々に國亂<sup>グン</sup>れ(中略)賊盜蠻蜂の如く紛々と起り自らを推して汗 *han* 貝勒 *beile* 大人 *amban* と云ひガシヤン *gashan* 毎に領主、ムクン *mukun* 毎に長となり互ひに攻合ひ兄弟同志殺し合ひ族 *uksun* 多くして力強きもの弱きを伐ち從へ甚しく亂れてありたり。

とある。この記述は當時の女眞民族社會の轉換期を物語るものとしてその重要性を強調せねばならぬ。

然してガシヤン及びムクンの語は當時の社會に於ける基本的な組織であるから、先づ之等の語を究明しなければならぬ。

ガシヤンは鄉村の意である。華夷譯語には「哈沙」と出て「村」の意とあるから明代より存した聚落形態である。清文鑑によると「城 *hoton* 堡 *hecen* の外圍に存在する幾つかのファルガの集團」の謂とある。ファルガ *falga* はギヤイ *giyai* に住居せるものを指す。ギヤイは「街道」「四辻」の意であつて、ファルガは「街道に沿ふ

て形成された一群の戸口の獨立集團に當り、最小の聚落形態である事が分る。フアルガの住民をフアルガンガ *falganga* と謂ひ、ザハロフに依れば十家族以上より成るとある。<sup>③</sup> さればガシヤンは幾つかのフアルガによつて構成された地縁集團であつて之等の結合の紐帶は後述する如き軍事的經濟的な關係に基いて居り、それ自身獨立した社會生活を營んで居る。吉林外記によると清朝に投降せる女真人を八旗に編入する場合、次の如く記して

率所屬來投者。遂編其嘎山達爲世襲佐領。法拉哈達爲世襲驍騎校(中略)嘎山達鄉長也。法拉哈達里長也。

(嘎山は *gahan* 法拉哈は *falga* 達は *da* (長の義)の對音)

とある。右文によるとガシヤン及フアルガには夫々長が居つてその地を治めて居るが、所謂ガシヤンタは凌純聲氏の報告によると、氏族の族長の場合の如く選舉制である事を述べて居る。然し乍ら明末亂離の社會にあつては實錄にある如く選舉制によらずして權力者が自らガシヤンタになつた事を物語り、その社會には權力に基いた隷屬關係が存した事を知る。處で滿洲語フアルガはムクンと同様に使はれる場合がある。

然らばムクン *mukun* とは何か。ムクンは「氏族」又

は「群」の意である。之に關係ある語としてハラ *hala* 「姓」及びウクスン *uksun* 「家長家族」「同族」が存しハラムクン(姓氏)ウクスンムクン(宗族)の如く用ひられる處でムクンの發生並びにその組織に就いてシロコゴロフは次の如く述べて居る。「元來滿洲語で氏族 *clan* を示す語はハラであるが、之は餘りに大きな單位である爲に之によつて族外婚、祭祀又は種々の一般的社會機能は統御し得られなかつた。勿論氏族會議の開催等は不可能であり、従つてこの單位の構成員間の結合は維持され得ず又正常なる諸機能も果されなかつた。その故に生活上の諸條件が滿洲人をしてこの制度を修正するの餘儀なきに至らしめた。滿洲族は絶えざる戦闘又は領土支配の關係からその内的組織を失ひつゝあつたので *clan system* を保持する爲に *clan* の新しい形と云ふよりは寧ろ *clan* の新なる分化——ムクン——を形成した。それは或る地域的依存關係を抱括した處の、ハラの全ての機能を充當するものである」と。<sup>⑤</sup> 我々はこの見解の妥當性を是認せねばならぬ。明末女眞社會に於ては、已にハラは「同一祖先より出自した」と云ふ種族(アイマン)の血縁關係を象徵する語に用ひられた。例へば海西女直族のエホ・

ヘダ・ウラ・ホイファの諸部族はそのハラをナラ *nara* と稱し、又建州女直のドンゴ *donggo* 部族の酋長ケチエ・バヤンの言葉に「我等は共に同一のハラ *ernu halai* の兄弟なり」とあり、何れも上述の事を證して居る。蒙文太祖實錄にはムクンを蒙古語アイマク *aimak* に宛てゝ居るが、この語はウラジミルツラフに依ると「アマイクとは部族の分派、正確に云へば近親集團である。然し乍らアイマクは血族の特殊な結合體たる氏族でない事を強調する必要がある。中世の蒙古人のアイマクは近かしの親族關係にある家族の集團・部族の一分派であつて同一共同の祖先から發した異氏族に屬する個人から成る事も出來た。かやうにしてアイマクとは互に親族關係にある家族古代の氏族が分裂して生じた各種の分家の同盟又は結合體である。重要な事は地域的結合と云ふ事が基本的な意義を持つて居る」と述べて居る。實際に於てこの見解がそのまゝ當時の女眞社會に當てはまるとは思はれないが、女眞民族社會にも蒙古の北歸と時を同じくして明の洪武永樂以降、蒙古族との間又は同一民族の間に絶えざる種族闘争が行はれ、敗退種族の分散或は遷住の現象が繰返へされた事を思へば、可成り説明の補足になる

と思へる。

以上説く所によりムクンは地域關係を基とした血族集團である事が分つた。而してフアルガがムクンと同様に使はれるのはフアルガンが同一血族で構成された場合を示すものであつて、この場合はフアルガムクンと稱される。吉林外記の前掲文に引きつゞいて

率族衆來投者。遂編其穆昆達爲世襲佐領。阿喇哈穆昆達爲世襲驍騎校。(中略)穆昆達漢語族長也。阿喇哈漢語副也。(穆昆達は *mukun* の *da* なり)

とある。シロコゴロフはムクンの長なるムクンタは選舉されるものである事を説いて居るが、前引實錄の記事は當時にあつてこの選舉制を否認するものゝ出現を物語つて居る。吉林外記の文を通じて見てもそこには同一氏族の間に隸屬關係が存した事が想像される。

さればガシヤンは異氏族をも抱括した地緣社會でありムクン又はウクスンは大體に於て同一氏族より分派した血族の集團であるが尙地緣關係が先行して居る事を特筆せねばならぬ。

而してガシヤン・ムクンは當時の社會經濟上の基本的な單位である。實錄の八旗の制の發生を説いた所に「そ

れより以前は戦に赴き卷狩 *aba* を行ふ時は、人の多き少きを問はずウクスン・ウクスンにてガシヤン・ガシヤンにて行かしたり」と説いて居る事によつて分る。又八旗の基本単位であるニルウ *niru* (佐領) をガシヤン・ムクンに置いた所以でもある。

かくの如くして當時の社會は原始的な氏族社會より凡そ遠ざかつた存在であり、然も前引實錄の亂離の物語りによつて明なる如く一路氏族社會の崩壊過程を辿つて居る。そこには氏族の多岐なる分化・富裕なる大家族の獨立、從つて隸屬關係より生じた階級の分化の現象が見られる。

例をマンジュ國の祖先であるニングタ *ningguta* 部の場合を見ると、實錄に「六人の人(トトフマ) 六ヶ所に城 *horon* を作り住みたるによりニングタ貝勒(ニングは「六」の意)と云つた」とある。此の場合城を作つたのはヘトアラ(興京) だけでその他はガシヤンを構成して居たものと思はれる。その地域は興京を中心として五清里乃至二十清里の範圍内に住した部族であつた。處で右の記述に續いてその時シヨセナと云ふ人の九人の男子共に強く又ギヤフと云ふ人の七男子共に老巧にして強かつた。

(中略) その二ムクン彼等の力を恃みて處々を擾し欺いた。ニングタの第四子ギョチヤンガ才智あり子リドン又勇強なりニングタの貝勒を率いて襲ひウユンタ⑨のムクンを破りギヤフのナダントを屠り、五嶺より西の方二百里内のアイマンを従はしめたり。

とある。この記事は實は當時の女眞社會の種族鬭争を物語つて居るので、ニングタバイレは六ヶ處の地域的に近接せる夫々のガシヤンの領主氏族と云ふよりは貴族的な家族であり、六人の人が各々ガシヤンタである事を物語つて居る。即ニングタは六人のガシヤンタの謂であり、各々が同一の祖先より出たと云ふ血族關係を內的紐帶とした部族を示すものである。他の二種族即ウユンタイは九つのムクン(ウユンは「九」の義)ナダントは七つのムクン(ナダンは「七」の義)が夫々同一の氏族より分化したとする種族の謂であり、シヨセナイ・ギヤフの族がその部を代表する領主氏族である。七男子・九男子は夫々ムクンタであつた事を示す。ニングタ部は異氏族を包括した地域的關係が主要なる構成因たるに對し、後の二者は血族による關係が主である。この物語りによつて後二者が種族鬭争に敗れて分散しニングタ部に隸屬した事を示して居る。この故に

ニンダタ部は領主氏族の支配の下に同族並に幾つかの異氏族が隸屬して形成されて居る事が分る。

是等隸屬せる氏族員をジュセン *jusen* と謂ふ。

實錄に滿洲五部の一たるスクスフ部の一部衆が太祖に投降して來た時の事が見え、その内に「四大人の曰ける、吾等各々より先に従ひ來たれるを思はゞジュセンとなす勿れ兄弟の如く慈しみ養へ」とあるのはこの事を説明して居る。清文鑑によるとジュセンを「滿洲奴僕」と譯して居るが奴僕は普通アハ *aha* と呼ばれ、ジュセンは發生の當初に於ては奴僕ではない。この事は實錄に「編氓」と譯して居る事により分る。

ジュセンは領主氏族と隸臣關係にある氏族を意味し或る程度の自由を有し奴婢家畜を貯へ<sup>⑬</sup>その生活狀態は領主氏族と異ならないものである。又清文鑑にジュセンと並び「ジュセン姓の人」*jusen halanga nyalma* と云ふ語が存してジュセンと同じ義とある。之はジュセンのムクンの内に異れる氏族の存在せる事を示すものであらう。何れにしてもジュセンは領主氏族に「奉仕」をなし、後節に説く如く戰鬪に従ひ卷狩の際の勢子となつた。而して領主氏族との間に婚姻關係を結ぶものも存した。陳仁

錫の無夢園初集によると「号姑嫗者女婿也」とあつてその注に「凡雜夷中國人心愛者俱配之」とある。雜夷はジュセンを指すものであらう。されば領主氏族とジュセンとの關係は封建社會の主從關係に類似して居る。太宗實錄に「其各旗貝勒所屬人員。稱爲其旗貝勒家諸申」とあるのはその名残りを示すものであらう。

ジュセンの内から領主氏族の長たるエジエン *ijen* (主領の義) の帷幄に參するものも出た。即ちグチウ *gucha* である。グチウは「朋友」「同伴者」の義で華夷譯語に「古出」と音じ「曷隸」と譯して居る。所謂腹心の徒である。さればエジエンが汗貝勒を稱する時その屬下のジュセンの首領はアンバン(大人)の地位に上る譯である。凌純聲の報告によると「大なる屯(ガシヤン)人口衆きにより隣族の侵入を防ぐ爲較々堅固なる土城を築く。ヘヂ族はこの土城を、霍通 *hoton* と云ひ城主を竹深達 *tusenda* と謂ふ」とある。竹深達はジュセンの長の義であらうがこの報告は右の事實を裏付ける資料になると思へる。

然してこの隸屬關係はその部族の分散と共に絆が切れるのであつて、この事は太祖實錄にニンダタ部が分散した後、その部の出であるヌルハチは、ニカンワイランが



建州に汗とならんとするのを見て「ニカンワイラン汝は吾が父のジュセンの一人なりき」と云つて居る事によつて知る。種族鬭争に敗れば一朝にして主客地位を異にする事は亂雜の社會では常に見る現象であつたらう。

かく見來るとジュセンは奴僕でなく領主氏族と共に眞社會の上層階級を形成して居た事が分る。

太祖實錄に滿洲の五部が太祖に投降して來る狀を記して「……大人その所屬のジュセン・イルゲン（イルゲン）を率いて降りて來た」とある。イルゲン *Hergen* は民・百姓の義であり、その下に *Abas* 即奴隸階級がある。共に當時の社會の生産部門を負ふ階級である。建州聞見錄に

自奴酋及諸子下至卒胡皆有奴婢互相買賣農庄至五十餘所

奴婢耕作以輸其主。軍卒則礪刀劍、無事於農畝者。

（中略）銀鐵草木皆有其工。而惟鐵匠極巧。女工所織只麻布。織錦刺繡則唐人所爲也。

とある。之は萬曆四十七年頃の建州女直族の社會狀態であり、後述する如く封建的な社會様相として理解さるべきものであるが、尙當時の階級の分化の狀態・財産の蓄積とその偏在を物語つて居る資料になるであらう。

以上ガシヤン・ムクン及び社會組織に就いての瞥見を

試みた。而して改めて冒頭に掲げた明末女眞社會の亂雜の記事を見ると當時の社會の變化して行く有様が背かれる。是等の現象は要するに氏族連體の精神を蹂躪する權力者篡奪者の現はれを物語る。かくして強力な武力を有する篡奪者の下に氏族群は解體して行つた。こゝにアイマンが成立する。

アイマン *aiman* は「種族」「王領地」「異氏族」の意である。先にニングタ部に於いて見た如くアイマンは幾つかのガシヤン或はムクンより形成され、それ等が同一祖先より分岐した血族であると云ふ意識がこの構成の内の紐帶となして居る。されば本來は地縁社會であり隣族の侵入を團結して防ぐ必要を生じて成合された點に重要な機能が存する。ニングタ部がドンゴ部の侵入を受けた時部族會議を開いて「我等は一つ祖に生れたる貝勒、十二のガシヤンに居れば亂れたり。一つ處に聚りて居らまし」と云つて居るのは此の事を物語つて居る。

この様な部族鬭争が行はれる場合常に聰明武勇の指導者を要する。ニングタ部に於いても六祖の中スヘチエンダイフ *Suheen daifu* リドンバツール *lidun batur* の名が見える。ダイフは「大夫」の轉化バツールは「勇武」

の意でありその人の人柄を示す他稱である。この様な所謂軍師はやがてその部の支配力をも克ち得る。併してその部にかゝる優れた指導者を欠く場合は事實に於てその部族は解散の他はない。先に指摘せる如く元來ガシヤン・ムクンはそれ自身一の社會的な基本單位であり分離獨立の傾向を持つものであるが、それが社會的不安から結びついたのであるからその結合力は極めて脆弱である事を知るべきであらう。氏族社會に於て見る如き連帶の精神血の復讐と云つた純粹なものは影をひそめ、物質的な打算の前には血の連りは弊履の如く省られなかつた。

次のニングタ部分散の挿話は此の間の事情を明瞭に物語つて居る。ニングタ部とドンゴ部との不和は他部の女を爭ふ事に起因したのであるが適々ドンゴ部ではその新夫が賊に殺されたのをニングタ部の仕業と誤認した爲に兩者間險惡になつた。その時ニングタ部のソウチャンは密かに使ひを敵に送り「汝の子を我がエルベンゲ・エケチエンゲ殺したりき。吾が人を吾殺さん。吾に財寶を齎せ」と云つたとある。この様な裏切り、「物資獲得の爲には自己所屬の無辜の民ですら虐殺する等の行爲は當時にあつては常に見られた現象であらう。然して愈々ドン

ゴ部の侵入を受けた時一族の一人が「一つのガシヤンに集りて如何に住まん牲畜を養はずに過さんや」と提言して、結局海西ハダの汗王台の保護を受けた。こゝにニングタ部は分散した。彼等は悉く貴族階級に屬するものであり、かゝる亂世では權力者の保護の下にある方が彼等の財産地位の安全が保障されるわけである。

この趨勢の赴く所は專制的な家長の絶對支配にかゝる族制國家 *ethnical state* の出現となる。この様な專制家長は如何に絶大なる權力を振つたか、建州聞見錄にヌルハチを記して

奴酋爲人猜厲威望。雖其妻子及素親愛者。少有所忤即加殺害。是以人莫不畏懼。

とある。又如何に貪亂な所有欲の持主であつたかは實錄にハダの王台を記して「各々罪をワン汗に訴ふるに金銀財寶葛布贈れる人々の罪は誠に非なりとも必ず是となし金銀財寶葛布贈らざる人々の罪は如何に是なりとも必ず非となし裁き財寶に貪り惡しく曲りたり」とある。

實錄に遼東女真族の分布を記して

マンジュ國<sup>ズン</sup>のスクスフ河地方のアイマン・フネヘ地方のアイマン・ワンギヤ地方のアイマン・ドンゴ地

方のアイマン・ゼチエンのアイマン・長白山地方の  
ネエン・ヤルギヤンのアイマン・フルン國のウラ地  
方のアイマン・ハダ地方のアイマン・ホイファ地方  
のアイマン・エホ地方のアイマン

とある。之によると幾つかのアイマンが結合してグルン  
を形成して居る事が分る。然してグルンはフルン及びマ  
ンジュの處に記されて居る。フルンは忽刺溫河（今の呼  
の流域に住した事により稱せられた明人の所謂海西女直  
に當る。マンジュは建州女直である。兩族は單なる地域  
的な分布に基く分類名でなく、兩者の間には異なる方  
言風習種族意識が存した。即老檔に「エホと我等（マンジ  
ン）は異なる言葉の女眞國」とあり、又エホとクレン  
城を爭つた時「その城は異なる姓 Hada の國のものとな  
るは非なり」とあるにより知る。然してフルン國は王台  
の下にマンジュ國は會つて王杲王兀堂の下に結合された  
族制國家である。一度之等は解體し新にヌルハチの時代  
にエホ・ハダ・ホイファ・ウラ及マンジュがグルンを形  
成した。それ等は一應は族制國家の下に理解すべきであ  
らう。之等の諸々のグルンが統一された時始めて女眞國  
が形成されるのであるが、マンジュ國の中頃以降、ジュ

セン國はもはや單なる族制國家ではあり得なかつた。

#### 註

- ① 清文彙 清文鑑 Zaharoff 滿露辭典。
- ② S. M. Shirokogoroff, Social Organization of the Manchus, p10
- ③ Zaharoff ibd.
- ④ 凌純聲「松花江下游的赫哲族」上冊二二六頁。
- ⑤ S. M. Shirokogoroff ibs. p16-17
- ⑥ 蒙文總彙のアイマクの條にムクン及アイマンの二義がある
- ⑦ ウラデミルツオフ 蒙古社會制度史 三二九頁。
- ⑧ 元良哈三衛の東侵、也先の亂。
- ⑨ 野人女直の侵入、海西女直の南遷、建州女直の遷住。
- ⑩ 所謂ニンゲタベイレは滿洲實錄によればニンゲタアイマンとあり、部族名である。太祖はこの部の出であるが太祖の出た時はこの部は分散し大體は王台の支配の下にあつたと思へる。而してベイレはアイマンの首領を示す稱號である。
- ⑪ 滿洲歷史地理第二卷 清初の疆域。
- ⑫ ニンゲタ・ウユンタのタはdaであり複數形でなく滿洲語da首領の意味であらう。ザハロフによると da は同じとあり、漢字は「達」で寫して居る。
- ⑬ 滿洲實錄滿文に太祖が家産を受けた事少かつた事を説いた條に家産は牲畜 ulha 奴婢 aha となつて居る。
- ⑭ 滿鮮歷史地理研究報告第十二和田教授「元良哈三衛に關する研究」の中に忽刺溫女直は建州女直と異り一種特異の刺墨を面上に施して居る事を指摘せられて居るが之等はその例である。

## 三

冒頭にマンジュグルンはマンジュなるヌルハチの君臨する國の謂である事を見次にグルンは幾つかのガシヤンを包括した數個のアイマンより成立せる事を説いた。

然らばガシヤンアイマンと云ふ如き本來は互に分離すべき性質のものをヌルハチは如何にして一の統一體に迄結びつけたか。それは言ふ迄もなく所謂八旗の制によつたので、この事は古來より常に繰返される處の答へである。而してそれが狩獵の形式に基いた組織である事は必ず指摘される點である。然し乍らその發生の具體的な説明は聞かない以上一應之に觸れなければならぬ。而してこの事には武人階級の發生の現象從つて氏族の長である汗は同時に武門の棟梁である事が説明されると思へる。

八旗の制を組織づけた當初、その最低の官として牛录額眞 *niru ejen* を設けたがその官名の起りを實錄に説明して「元來滿珠國の人獵に行き獵を開く時、人皆箭を執りて十人の人一人のエジエン *ejen* (主の意) を置きてその十人を治めその各々の位置を更めずに行つた。その置いた人をニルウエジエンと呼んだ」とある。嘯亭雜錄に<sup>①</sup>

行圍を分けて行圍と合圍の二種とし前者の條に「只以數百人分翼入山林。圍而不合。謂之行圍」とあるが實錄の記事は恐らく之に相當するものであらう。兎も角も狩獵に出かけた部落民は悉く弓箭をとり自ら追ひ且獲物を射たのである。その際の指導者であるエジエンの役には恐らくは狩獵の作法習慣に通じた老巧な經驗者が選ばれたに違ひない。エジエン同志は同じ血族又は部落の熟知せる間柄であり且多年の熟練によりその間自ら連絡が出来て圓滑に共同作業が行はれたものであらう。この狩獵の目的の大部分は必要なる物資を得る以外に意味がない。従つてその狩獵法も極めて素朴な内輪的なものであり、組織と云ふ程のものではなかつたらう。然し乍らガシヤンが行ふ場合にはかゝる素朴な形式は許されない。幾つかのフアルガの人員が凡て参加し異氏族が混入して遙かに大仕掛になり勢ひ組織的な方法が發生せざるを得ない。こゝに所謂卷狩の形式が發達した。そこでは指導者・射手・勢子と云ふ様に役割が分擔される。實錄ではガシヤンに於ける卷狩の形式を記して居ないが指導者にはガシヤンの長が當り射手はガシヤンの中の武勇のものは勢子頭はフアルガの長・勢子はジュセンが當つたに違ひ

ない。之がアイマンの場合は更に大仕掛になつて行つた事が想像される。

かくてガシヤンを結びつけアイマンを結びつける組織は平時に於ける卷狩に基いたものであつた。實録の八旗の成立を記した所に「三百人に一人のニルウエジェン(牛糸の主)五ニルウに一人のジャランエジェン *jalan ejen* (甲喇の主)五ジャランに一人のグウサイエジェン *gūsai ejen* (旗の主)グウサイエジェンの左右兩側にメイレン *meiren ejen* (圍肩の主)を置いた。黄紅藍白四色の蘇 *turun* があつた。四色の旗をふちとりて八色の蘇となした」とある。これが卷狩の形式と如何なる風に結びついて居るか。

嘯亭雜錄によると「行圍の時は蒙古喀爾沁等の諸落部落年に一千二百五十人を虞卒となし之を圍牆と謂ひ合圍の役に供す。清廷の狩獵場は承德の北四百清里の木蘭の地に存したので蒙古族が勢子等の雜役を務めた中に黄蘇を設けて中軍となし左右兩翼は紅白二蘇を以つて分ちて標識とした。兩翼末は國語で烏圖裏と謂ひ各々藍蘇を立て、標識とし皆中軍の節制に聽した。<sup>②</sup>凡そ管圍の大臣は皆王公大臣が當り蒙古の王公台吉等は副とな兩鳥る。圖裏は夫々巴圖魯侍衛三人が引率した」とある。

清文鑑の敗獵の條に中軍の黄蘇のある所は圍底 *fene* と謂ひ、兩翼の紅白二蘇のある所を圍肩 *meiren* と謂ひ、烏圖裏は *uturi* の對音、物の端 *dube* の義である。*fene* は「底」*meiren* は「肩」の意である。

八旗のジャランの語は「區切り」の意で右の蘇の代りに小旗 *kiru* が用ひられるに至つてこの語が使用された。五ジャランは

頭甲喇 *fere jaran* 二甲喇 *dashūwan i meiren* (左の圍肩) 三甲喇 *jebete i meiren* (右の圍肩) 四甲喇 *dashū wan i dube* (左のウツリ) *jebete i dube* (右のウツリ)である。右の卷狩の形式をそのまゝ移したものであらう。

今中軍の所に汗を置き紅白藍旗の所に一族たるベイレを置き、副たる地位にアイマンの長を置き、勢子頭にガシヤンの長を、勢子にジュセンを置きかへればそのまゝ當時の卷狩の形式であつたに違ひない。服屬するアイマン・ガシヤンの數が増加するに従つてこの形態に倣つたものを八團體つくりその團體を區別する爲に黃白藍紅による色分けを適用し、一の旗の内に於ては先の四色色分け法に換へるに旗の大小による法をもつてした。實録に八旗の成立を述べた記事が隨處に出るのはその時々的人员の増加とそれに伴ふ組織の改變の道程を示して居るのである。この卷狩による方法にてアイマンガシヤンは結

びつけられた。ガシヤンは八旗の基本単位となり、ガシヤンタはニルウエジェンとなつて三百人を領して参加した。然してガシヤンタは平時ガシヤンの内よりこれ丈の人数を整へ且それに要する一切の用意を自ら負擔しなければならぬ。曾つてニルウエジェンは狩獵の時の指導者であつたがこの時に到つては軍民を治める小領主の意に變つた。ガシヤンの長はアイマンの長に、アイマンの長は旗の長である汗の一族のバイレに、バイレはグルンの長たる汗に隸屬した。この事を建州聞見録には

凡有雜物收合之用。戰鬪力役之事。奴酋令於八將。

八將令所屬柳累將。柳累將令於所屬軍卒。令出不少

遲緩。絕無呈訴辦理爭訟直之事云。(柳累はニルウの對音)

と記して居る。

此の卷狩による組織は方にそのまゝ敵國を侵掠する組織である。美しい女・人民・奴婢・牲畜・財物の掠奪は當時の社會生活を營むには重要且不可避な企業であつた。

建州聞見録に

出兵之時。無不歡躍。其妻子亦皆善樂。惟以多得財物爲願。如軍卒家有奴四五人。皆爭偕赴專爲槍掠財物故也。

とあるのを見れば推して知るべきであらう。その故に卷狩や侵掠に際して優れたる謀を廻らし且武勇の人の治める國に凡ては隸屬して行つた。そこでは常に豊富な分配が豫約されて居たからである。老檔に

スレクンツレン汗は元から戰ひに赴いて得た獲物多  
いなる時は公平に分けた。獲物少き時は「百匹の羊  
を百人が食へてもつくせないと一匹の羊を一人が  
食へてもつくせないと云ふ。さりとてそれを衆に分  
けては誰に當るか。一匹もない人に與へかして一  
人に悉く與へた

とあつてヌルハチの氣前の好さを讃へて居る。彼は又掠奪した女を部下にも欠くことなく分ち、女なきときは金錢を與へた。その衆心を得る事の巧なる、亦マンジュと呼ばれし所以であらう。

然らばグルンの君長たる汗は何を以つてその國家組織又は社會秩序を維持したか。それは汗に直屬せる強力な軍隊即私兵によつた。之をバヤラ bayara と謂ふ。武皇帝實錄の擺押拉の註に「即精銳内兵也」とある。又陳仁錫の無夢園初集には「號擺言者好漢也」とあり、その注

披重甲衝營破陣者俱是。又有號紅擺言最精健。

とある。之等は隸臣關係にあるジュセンの場合と異りその「武勇」の故を以つて汗に召抱へられた自由民である處に旗の兵と本質的に異つて居る。バヤラが後になつて八旗の特別制度たる護軍營となり皇帝の親兵となつた。

バヤラは戰鬪に際しては汗の側に侍してその黃纛を護り卷狩には汗に従つて射手となつた。

バヤラの將官に *tu i janggin* (蘇の章京、章京はエ  
ジュエンに代つた語)

*juwan i da* (十人の主領)等が存するが皆その役目より生じた名稱である。ニルウエジュエンは「十人の射手の長」の謂であつたがこのバヤラの十人長が方にそれに當り、所謂ニルウエジュエンは領地ガシヤンを支配する官の名稱に轉じた。この語の變化の中に社會の發展が遂に軍民分離の現象を齎した事を物語つて居る。汗は常に強力なバヤラを養ひ以てグルンに君臨し忤ふものは挫ぎ従はないものは征服した。之武人階級の濫觴と云へやう。建州聞見錄に

胡語呼拜阿羅者。奴酋之手下兵也。五千餘騎極精勇

三。七將皆有手下  
兵而未詳其數

とあつて、汗の兵の強大を記し又八旗の長たる貝勒は夫

々私兵を貯へた事を知る。こゝに於てマンジュ國は單なる族制國家ではなく既に又封建的な社會様相に迄發展して居る事を知るべきであらう。都城たるヘトアラは城下町として考へられ、農業獎勵は農民尊重の思想となつて現はれ、<sup>④</sup>節儉尙武が説かれる等の事象は此の事を物語るものではあるまいか。

然して封建社會を基礎づける觀念は「服從」の精神であらう。この社會の凡ゆる階級は「服從」の精神によつて秩序づけられる。考檔に汗の諭書が存して

天の降した汗は下の大人等を慈しみ養ひ大人等汗を敬ひて過すのが道である。ベイレ達はジュセンを慈しみジュセンはベイレを扶け、奴僕は主人を扶け主人は奴僕を慈しめよ

とあつてこの精神を説いて居る。この結果は順治元年到北京に適々來合はした日本人の眼には次の如く映じた。即韃靼漂流記に

主人と家來とは親と子の様に仕候、召仕候者をいたはり候事、子のごとくに仕候、又主をおもひ候事、親のごとくに仕候故、上下甚親く相見へ申候、大名の儀は不存候得共拾人二十人召使ひ候人之已下は皆

其通りに御座候下人何程召使ひ候ても女房を持せ夫婦ともに扶持仕候

とある。思ふに八旗の制とは正にかゝる精神により成立つて居たのである。

#### 四

以上マンジュ國は如何なる社會様相の下に形成されたかを極めて大雑把に概観した。

マンジュグルンの名稱は太宗の末年國粹主義の檯頭の下に蘇つた。太宗實錄天聰九年冬十月庚寅の條に諭曰。我國原有滿洲・哈達・吳喇・葉赫・輝發等名乃無知之人往々稱爲諸申。夫諸申之號。乃席北超墨之裔。實與我國無涉。自今以後一切人等止許我國滿洲原名。

とあつて以後滿洲の名稱は不動となつた。然してこの上諭は又從來誤解された文章でもあつた。

#### 註

① 嘯亭雜錄、卷七木蘭行圍制度の條。同條には卷狩の法が詳しく述べられて居る。

② 卷狩を始める時は、中央の黃蘗の所から左右に向つて列を

なして走り出す。その時の先頭をウツリと云ひ藍旗を持つて居る。藍旗が二つあるのは狩獵區域を遠巻にして環陣を作る場合、このウツリが雙方から合して環を完成する爲である。これを *utuuri acambj* (ウツリか) と云ひ、この時を合圖に漸々と輪を縮めて行く。

③ 此の事は別に考證を要する。

④ 老檔乙卯年の條に大人等に節儉を説き「田を作る窮乏餓渴の人」「城堡を壘み木土石を運ぶ窮苦の人」等を慈しみ尊重すべきを説いて居る。そして同年に起きた明との邊境問題は明廷がマンジュ國をして邊境の耕地を放棄せしめ農民を撤退させて耕作を不可能ならしめんとした事に起因する。

#### 追記

この小論はウラジミルツォフの蒙古社會制度史に多くの指示を受けた。然して一、二、三節は各々獨立して居るが同時關聯した事柄と思ひ纏めたけれど説明不充分的譏りは免れない。

北平で滿文原檔を調査して頂いた三國谷學士、李德啓氏並に多くの指示を仰いだ今西守屋兩學士に深く感謝の意を表する次第である。

尙今秋當地で開催された東洋史談話會大會に於て、廣島文理大戸田學士は「寧古塔貝勒について」と題されニングタ部の構成に就きて論ぜられたが、原稿締切りの後であつた爲に同氏の論には觸れ得なかつた。